[国内]

有地左右一＋笹岡敬

蛍光管が作り出す原初の光

8月22日～9月3日／ギャラリーサージ（東京・岩本町），秋山画廊（東京・日本橋）

作家　有地左右一（1957年生まれ），笹岡敬（1956年生まれ）2作家によるコラボレーション活動は，オンギャラリーでの個展「WATER 1988」(88年，大阪）でスタートする。91年まで続くこのWATERシリーズでは，水槽の水に光を当て，その微かな波形を映し出した。92年以降現在に至る「LUMINOUS」シリーズでは蛍光管の光を点滅させたり，変化させることで，光による造形空間を提示している。

主な個展は集雅堂ギャラリー（大阪），ギャラリーサージ，NICAF 1994，ギャラリー16（京都），イトーキクリスタルホール（大阪）。

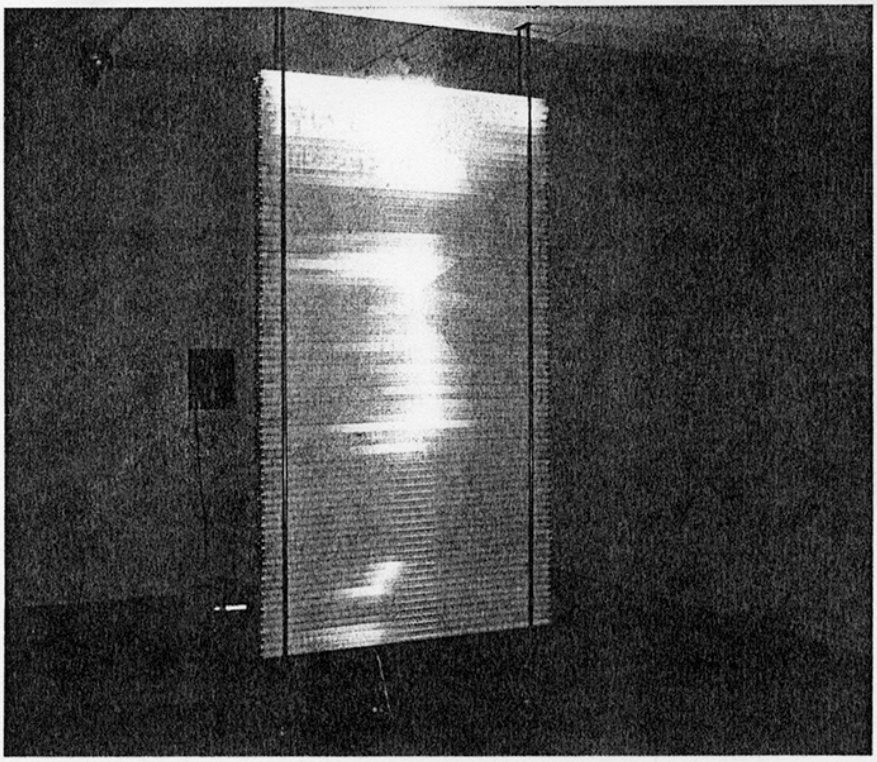
作品　「LUMINOUS 1994」と題して，2画廊にインスタレーション各1点が展示された。

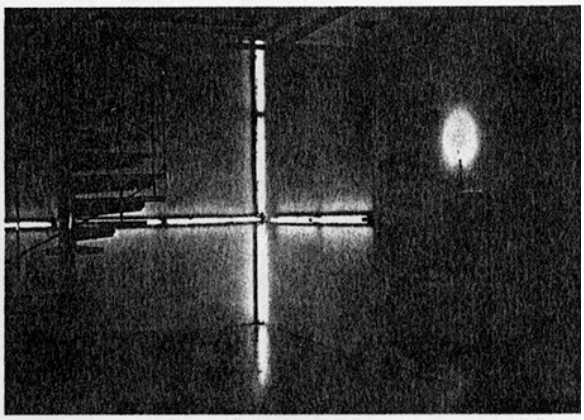
ギャラリーサージの作品は，無電極でも高周波の照射によって蛍光灯が光る性質を利用したもの。200本の蛍光管を2層に重ねて部屋の中央に壁を作り，グローランプが点灯する音をシンセサイザーで増幅し，高周波に反応させて蛍光管を点滅させる。「金属音なのに水の音のように澄んで柔らかい音」(ギャラリーサージ・酒井信一氏）が鳴るたびに柔らかな光の波が蛍光管の壁に描かれ，消える。

秋山画廊では，壁面に設置した蛍光管22本に通常より低い電圧を流し，管を輪切りにするような流れる光の輪を幾重にも作り出す。ギャラリーサージの動的な作品と違い，「まるで水中にいるような」(秋山画廊・秋山田津子氏）ストイックで静かな空間だ。

日本では蛍光灯は日常的に使われるもので，日頃その光を意識することはあまりない。しかし「LUMINOUS 1944」の放つ光は，人工的で突き刺すような蛍光灯の光と違い，どこか懐かしく繊細で，触れると壊れてしまうような“安らかな”光である。それは我々の記憶の底に在る「原初の光」なのかも知れない。両作品とも水を一滴も使っていないが「水」のイメージに満たされており，静けさが見る者の内部へと染み込んでくる。

価格　ギャラリーサージ，秋山画廊のインスタレーションとも各200万円。





「LUMINOUS 1994」より
(左）ギャラリーサージのインスタレーション　1994
120×270cm
(上）秋山画廊のインスタレーション　1994